

梟山伏攷

—

狂言「ふくろふ」は、梟を真似る仕草が観客の笑いを誘う。

二、三日前、山に出かけた弟は、それ以来、奇声を発し、一向に回復する様子がない。兄は心配し、日頃親しくしている御先達を訪ねて相談した。

兄から加持を頼まれた山伏は、

某も此間、別行の子細有て何方へも出でねども、そなたの事じやに依て、いてもやらうか、

(大蔵虎寛本「ふくろふ」)

中野 真麻理

と、思着せがまし、兄弟の家へ出掛けて行つた。

彼等の家に到着すると、山伏は早速、「橋の下の菖蒲」の文を唱える。

いら高の珠数ではなうて、むさとしたる草の実を繋ぎあつめ、珠数と号く、此の珠数にて一折りいのる成らば、
 などが奇特の無るべき、ボロオンく、橋の下の菖蒲は、
 たが植たしやうぶぞ、折れ共をられず、かれども茹られず、ボロオンく、
 (同右)

弟は「ホ、ン」と奇声を発した。梟の鳴き声にそっくりではないか。兄に問い質すと、なるほど、弟は山で梟の巢下ろしをしたようだと答へ。

「ム、すれば疑ひもない、梟が憑いた物で有う」、山伏は大仰に「烏の印」を結ぶと、梟調伏に取り掛かった。

いかに悪心深き梟なりとも、烏の印を結んで掛け、東方に降三世明王、南方に軍荼利夜叉明王、西方に大威徳明王、北方に金剛夜叉明王、中央に大日大聖不動明王のさつくにかけて、今一祈りいのるならば、などか奇特のなかるべき、ボロオンくくくく、（同右）

突然、兄が奇声を發した。「ホ、ン」。山伏はすっかり慌てた。

「烏」の印は、「梟」に対して最も効力を發揮して良いはずであつた。なぜなら、梟と烏は仇敵の間柄であつたからである。

昔話「梟紺屋」によれば、梟はかつて紺屋であつた。或る時、洒落者の烏がやって来て、「誰より美しい色に染めて欲しい」と依頼した。ところが、梟は烏を真黒に染めたので、激しい怒りを買つてしまった。以来、報復を恐れた梟は、夜しか出歩かないようになった（『日本昔話大成』第一巻・動物昔話）。『俳諧類船集』は「梟」の付合に「鴉さはぐ」を

挙げる。

両者の確執は經典にも記録されるところであつた。『雜宝藏經』卷第十「烏梟報怨縁」は、一羽の烏の姦計によつて数多の梟が慘殺されたという一件を収載する。⁽¹⁾『諸經要集』卷第十六も『雜宝藏經』を引用し、同話を記録している。

人間に取り付いた「梟」を退散させるのに、「烏の印」以上に効果觀面の手段はほかに有り得ない。にも拘らず、狂言の梟は兄にまで取付いてしまつたらしい。兄弟は山伏に息を吹き掛けながら、「ホ、ン」「ホ、ン」と鳴く。

是はいかな事、又兄へもうつゝた、兄をも祈らずはなるまい、

いかにあちらこちらへうつる梟なりとも、いろはの文にて今一祈り祈るならば、などか奇特の無るべき、ボロオンくくく、いろはにはへと、ボロオンく、ちりぬるをわか、ボロオンく、よたれそつねな、ボロオンく、
（大藏虎寛本「ふくろふ」）

遂に梟は当の山伏にまで乗り移つた。「ホ、ン」。山伏は兄弟と共に「ホホン、ホホン」と鳴き続け、梟よろしく手足

を締め、羽繕いをしてみせる。狂言はここで終わる。

果たして、狂言「ふくろふ」の可笑しみは、狂言師たちの巧みな物真似だけにあつたのだろうか。

二

狂言の山伏が引用した呪文「橋の下(2)の菖蒲」は、子供たちの遊び「草履隠し」の唱えことであつた。『嬉遊笑覧』巻十二には、

今童のいふハ、ざうりけんじよけんじよおてんまてん
ま橋の下(1)の菖蒲はさいたかさかぬかまださきそろハぬ、
めうくぐるまを手にとてみたればしどろくまどろくじ
うさぶろくよ、といへり、
(巻十二下「草木」)

と伝えている。周知の児戯の唱えごとが、狂言の山伏によって重々しく唱えられた時、観衆は一斉に破顔したことであらう。

俗に「いずれ菖蒲か杜若」と言われるごとく、この二種類の夏草の外見は酷似する。

「橋の下(1)の菖蒲は咲いたか咲かぬかまだ咲きそろはぬ」と歌われた情景は、直ちに『伊勢物語』第九段にも名高い「八橋」の風景を連想させたであらう。尾形光琳作「燕子花図」(根津美術館所蔵)、酒井抱一作「八ッ橋図屏風」(出光美術館所蔵)、尾形光琳作「八橋蒔絵硯箱」をはじめとする文具の数々、また、「流水に杜若文様打掛」「八橋文様振袖下絵」などの装束、武具「八橋図透鐔」等々(京都国立博物館編『工芸に見る古典文学意匠』、昭和五十五年、紫紅社)、八橋の構図は、人々にとって極めて身近なものであつた。

八橋が袖とみ沢のかきつばた(雑俳『丹船評万句合』)

他方、「橋の下(1)の菖蒲」に音の近い名句が伝えられている。それは、『和漢朗詠集』巻上「首夏」に収める白詩の一節である。

甕頭竹葉経春熟
階底薔薇入夏開

甕もとりの頭はしらの竹葉は春を経て熟す
階はしらの底もとの薔薇は夏に入つて開く

(『和漢朗詠集』)

右は『白氏文集』卷十七「薔薇正開、春酒初熟、因招劉十九張大夫崔二十四、同飲」を出典とする。古来、人々愛誦の名句であつた。『源氏物語』「賢木」には、光源氏と韻塞に興じ、負けてしまった三位中将が、風雅な負けわざを催した描写が語られる。そこには右の白詩を踏まえた表現が見られる。

二日はかりありて、中将負けわざし給へり、ことくしうはあらでなまめきたる檜破籠ども、賭け物などさまぐにて、けふも例の人々多く召して文など作らせ給、階の底の薔薇、けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにおかしきほどなるに、うちとけ遊び給、

（賢木）

『栄花物語』卷第十一「つばみ花」もまた、同句を本文に転用した。

薔のほとりの竹葉も末の世遥に見え、階の下の薔薇も夏を待ち顔になどして、さまぐめでたきに、朝拝よりはじめてよろづにをかしきに、宮御方の女房のなりど

も常だにあるに、まいてもの鮮に、薫深きも理と見えたり、
（「つばみ花」）

『堤中納言物語』には、この句を「誦し」て行く中納言の風姿が描写されている。

中納言まかりで給ふとて、はしのもとのおうびもと、うち誦じ給へるを、若き人々は飽かず慕ひぬべくめで聞ゆ、
（『堤中納言物語』「逢坂越えぬ権中納言」）

下つて、『多武峰所伝連事』『乱曲久世舞要集』にも、白居易詠の投影が看取される。

某ガ存候ハ、面々薔ノ頭リニ倚ツテ竟夜酌竹葉給候者
自ラ避暑ベク覚ヘ候、
（モカサ）

（『多武峰所伝連事』「吟納涼詩歌連事」）
もたひのほとりの竹葉は、春を経て熟すとか、階の本の薔薇は又夏に入りてぞ開くなる、

（『乱曲久世舞要集』「さんさう」）

薔薇を詠み込んだ白詩は、『和漢朗詠集』に採られたこと
 によつて、書承ばかりでなく、口承によつても伝承されて行
 く路を与えられた。耳からの伝承は、しばしば同音異義語と
 の置換を引き起こす要因となる。「階」の底の薔薇」もまた、
 そうした道筋を辿つて行つたと推測される。『和漢朗詠集』
 の室町期の古注釈を繙いてみる。⁽³⁾

東京大学本『和漢朗詠集私注』は、「薔薇」を取り上げ、
 夏の花であることを記す。書陵部本『朗詠抄』もまた同じ。

甕頭^{ノリ} 竹葉^ハ 経^シ 春熟^シ 階底^ノ 薔薇^ハ 入夏開^ニ

薔薇正開^ニ 春酒初熟^ス、或曰初夏即事。白。百詠注云、宜

城出^ニ 竹葉酒。本草云、薔薇夏早花開也。

〔和漢朗詠集私注〕「首夏」

甕^{モウ} 頭^{タイ} 甕ハ、大瓶ノ名也。但シ、日本ノ大瓶ニハアラ
 ス。腹フクラカニシテ、頸短ク、ヒシヲ色也。竹葉ハ、
 酒ノ名也。古酒、必ス春過テ、其氣味ヲマス。故ニ、
 熟スト云ヘリ。下旬、可然宮中ニハ必階^{ハシ}ヲ点^チスル也。
 其ノ階^{ハシ}ノ下ニハ、薔薇^{シヤウ}ヲ植^レル。夏ノ初^{ハツ}ニ先ツ開ル花ナ
 レハ入夏ト云ヘリ。白居易カ作也。

〔書陵部本『朗詠抄』「首夏」

静嘉堂文庫本『和漢朗詠集和談鈔』も同様の記事を載せ、
 「薔薇」が夏の花であることを注している。

甕^{モウ} 頭^{タイ} 竹葉^ハ 経^シ 春熟^シ 階底^ノ 薔薇^ハ 入夏開^ニ

此ハ、白居易、薔薇正開春酒熟ト云事ヲ題スル絶句ノ
 発句也。甕者、大瓶ノ名也。竹葉ハ酒ノ名。宜城ニ竹
 葉有リ。美酒出タリシ故也。経春熟者、酒ハ必ス春過
 テ氣味濃カナル故□。階者、キタハシ也。薔薇者、首
 夏ニ必ス花発ル物ナル故、爾云也。

〔和漢朗詠集和談鈔〕「首夏」

天理図書館本『和漢朗詠集見聞』は「階」と「薔薇」と
 の関係について、さらに詳しい。即ち、薔薇は必ず上方に向
 かつて枝を伸ばして花開く。そのため、「階」の「下」に薔
 薇を植えるのだと説く。

甕頭竹 甕頭トハ、酒屋ニハ、メクリニ必ス殖^ル竹也。
 酒ノ守ナルカ故也。依之、甕ノ頭ノ竹トハ云也。春ヲ
 経ハ、去年ノ竹ハ堅ナリテ、定而、用ニモ可仕也。階底
 トハ、前栽ニハ、皆花ヲ殖者也。然ハ、薔薇ハ、必ス

楼ニ登ル為、階ノ下ニ殖ト云也。其花ハ、夏開ク花ニテ有也。

〔和漢朗詠集見聞〕「首夏」

他方、永青文庫本『和漢朗詠集永濟注』は注釈部分に「ハシノモトノ薔薇」と記し、「ハシ」に「階」の字を当てていない。仮名で表記された場合、「ハシ」が「階」であるのか、「橋」であるのか、直ちには判然としない。

甕頭竹葉ハチワサ經春熟ノモトノハチニ 階底薔薇入夏開 白

此詩、文集十七ニアリ。上句、甕トイハ、酒入ル、ウツハモノナリ。竹葉トハ、酒名也。百詠注云、宜城出竹葉酒トイヘリ。タケハノ露ノタマリテ、酒トナレル故ニ、酒ヲ竹葉トイフナルヘシ。經春熟トハ、酒ヲハ、ハルツクルモノナレハ爾云也。下句ハ、本草云、薔薇ハ夏草云々。言口ハ、ハシノモトノ薔薇モ、ヨリヲエテ、ヒラケニケリト云也。

〔和漢朗詠集永濟注〕「首夏」

仮名表記、或いは音からのみ判断して語彙を当てる場合、該当語彙を取り違える可能性は極めて高い。『和漢朗詠注』はその好個の例である。本書は、「階」の「底」とあるべき

箇所を、同音異義語「橋」と誤記するのみならず、薔薇は「橋ノ下」に植えられる夏草である由を述べている。

甕ト者、大ナル壺也。酒作ル器モノ也。

竹葉ト者、酒ノ名也。旧年ニ作ル酒ナル故ニ、經春ストハ云也。秦ノ代ニ、竹葉ヲ食スル馬有リ。醉テ死ス。鼻ノ中ヨリ 竹生出ツ。小兒、取此竹、名馬乗テ遊フ。此ノ竹馬ニ乗ル者、命五百才也。馬ノ、竹葉ニ酔フ

故ニ、酒ヲ、名竹葉也。下句ニ、前栽ニ殖ル草、皆在所定レリ。薔薇ハ、橋ノ下、殖ル草也。此花、夏ノ始開ル也。

〔国会図書館本『和漢朗詠注』二「首夏」

右の諸例に拠れば、「階の底の薔薇」は、薔薇の習性を生かし、「階の下」に植えられたことを踏まえた句だという。「階の底の薔薇」が「階の下」の薔薇へ、さらに「橋の下」の薔薇へと変化を遂げるまでの距離は、短いものであったろう。

目を「薔薇」に転じてみる。「薔薇」を示す語句を方言に探ると、「しようぶ」と称する例に行き当たる。即ち、三重県阿山郡では「薔薇」を「しようぶ」とも呼んでいた（北岡四良『三重県方言資料集』伊賀編）。

他方、「菖蒲」は一般に「しょうぶ」「さうぶ」。しかし、富山県ではこれを「しょうび」と発音する場合がある（『富山県方言集成稿』）。

薔薇と菖蒲はいずれも音が似通っている上、方言では両者を混同しても無理からぬ例が実在することになる。加えて、菖蒲もまた薔薇と同じく夏草である。「橋の下」の薔薇が「橋の下」の菖蒲へと姿を変えるのは、至極無理のないところであつた。両者の距離は咫尺の間にある。

子供たちが歌い、狂言の山伏が唱えた「橋の下」の菖蒲の源流は、恐らく、『和漢朗詠集』にまで溯る。「朗詠」という形態を通し、我が国に於いて愛誦されたこの白詩は、延年久世舞に引かれるに至つて、人々の耳に入る機会を一層増大させた。むしろ、耳からのみ、聴覚によつてのみ、同句を受け入れる機会を可能にしたともいえよう。一方で、人々の視覚にとつては、「八橋」は十分に親しい図様であつた。

「橋の下」の菖蒲は、聴覚的要素と視覚的要素の重なり合ひから、いともなく誕生した口ずさみであつたと思う。

三

狂言に登場する山伏は、いずれも大失敗を仕出かし、人々の哄笑に送られながら退場する。犬に吠えられ（『犬山伏』）、蟹に耳を挟まれ（『蟹山伏』）、欄干との験比べに負け、ほうほうの体で逃げ出してしまふ（『欄干山伏』）。

「柿山伏」は、余りに美味そうな柿につられ、木に登つて盗み食いをしていところへ、柿の木の持ち主が現われる。

柿と申物は、あて人の取たがる物で御座る程に、見廻ひに参らうと存る、先、そろり／＼と参らう、誠に、当年の様に大なり致いた事は御座らぬ、人斗りでも御座らず、鳶鳥もきたがる程に、油断のならぬ事で御座る、

（大蔵虎寛本「柿山伏」）

山伏を見つけた主は立腹し、「山伏を荒立れば却て仇を成すと申程に、散々になぶつて帰さう」と一計を案じる。彼は山伏に烏や猿の鳴き真似をさせた揚句、「夫々、あれをよう／＼見れば猿でも烏でもない、鳶じや」と言い募つた。鳶なら梢から飛んで見せなければならぬ。進退極まつて木から

飛び下り、腰を強打した山伏は、主に食ってかかった。この尊い山伏に烏や猿の真似をさせ、終いに「鳶」とは何事か。「物して山臥のはては鳶に成る」と言うから、自分もそろそろ鳶に成ったかと思つて、あの高い枝から飛んだのだ。「まだ産毛も生へぬものを飛せおつて」、腰の骨をしたたかに打たせたな。山伏は主を追い回しながら退場して行く。

山伏は、しばしば「柿衣」を身に付けて活動する宗教者であった。柿衣とは「麻布を柿漆にて摺たる」衣を指す（「木葉衣」）。

六代御前十六と申し文治五年の春の比、うつくしげなる髪を肩の廻りにはさみおろし、かきの衣、袴に笈などこしらへ、聖にいとまこうて修行に出られけり、斉藤五・斉藤六、もおなじさまに立て御供申けり、

（『平家物語』巻第十二「六代被斬」）

狂言「柿山伏」では、その山伏が「柿」の實の盗み食いを見咎められ、散々に痛め付けられたことになる。とりわけ、烏・猿・鳶と、いずれも修験道に関係深い動物の真似を強いられた点、注意しておく必要があるう。

狂言「ふくろふ」では、山伏は梟調伏に挑まなければならなかった。古来、梟は悪鳥として知られた。中国に於いても、「鵂目」（『山海経』）、「鵂目虎吻」（『漢書』卷九十九・中「王莽伝」）、「人疾之如讎敵、惡之如鵂梟」（『顔氏家訓』卷三「勉学」）等々、悪鳥梟の例は枚挙に暇がない。また、「化鵂為鳳之術」とは、不可能な事柄を意味する比喩であった（同右）。梟は母を食らう不孝鳥であり、凶事を告げる悪声と醜い容姿を備え、昼は視力に不自由し、身動きもままならず、小鳥たちの嘲笑の的となつていた（『南方熊楠「小鳥狩に梟が出る」』『南方熊楠全集』第四卷雑誌論考Ⅱ）。これほどの悪鳥、梟が山伏狂言に登場する理由は何か。

その答えを探る手掛かりは、御伽草子「ふくろふ」が与えてくれるように思われる。本作品は老梟の悲恋の顛末を語る異類物の佳作である。現在、伝本は、京都大学蔵・寛永期刊絵入大本一冊、東京大学国文学研究室蔵・明暦四年写「ふくろふのさうし」一冊、松本隆信蔵・奈良絵本「ふくろふ」一冊、刈谷図書館蔵・明治十四年写「鳥物語」一冊、静嘉堂文庫蔵・慶安元年絵入写本「うそひめ物かたり」一冊、国学院大学蔵・奈良絵本「ふくろふ」二冊、個人蔵・奈良絵本一冊の計七本が報告されている（松本隆信「増訂室町時代物語

類現存本簡明目録』『御伽草子の世界』所収)。今は松本本『ふくろふ』に拠つて粗筋を追う。

越後国亀割坂の付近に、一羽の年老いた梟が暮らしていた。当年とつて八十三歳。或る雨の日の徒然に、老梟は越し方行く末をつくづくと考えた。この世の名残にもう一花咲かせたい。彼はうら若い鶯姫への恋に向かつて盲進する。老いらくの恋を成就させたのは、越後国に名高い米山薬師であつた。恋の首尾を伝え聞いた諸鳥たちは、思い思いに鶯姫に歌を贈つた。しかし、鶯は噂を耳にして激怒し、はいたかの小六に梟殺害を命じた。梟は逸早く危険を察知して木陰に逃げ込んだが、鶯姫は無残にも殺されてしまった。悲嘆にくれる梟は出家し、姫の菩提を弔つたという。

本作品は、登場する諸鳥の特徴を踏まえた脚色が随所に見られ、言葉遊びを豊富に用い、挿絵にも意を凝らしている。抑も、老梟が鶯姫への恋を成就させようと決意を固めたのは「ある雨中の徒然」のことであつた。俳諧では「梟」の付合語に「雨氣」(『俳諧類船集』)「雨ノ日」(『俳諧小傘』)を挙げる。御伽草子の異類物の大作として著名な『十二類絵巻』に於いても、梟は「夜討ちにすとも、はれたらんには星の光もありぬべし、雨夜に寄せばや」と提案している。

『ふくろふ』の本文中、主人公の居所が明示されたことは、必ずや重要な意味が込められていたに違いない。

梟が祈願を込めた米山薬師は、亀割坂のごく近くに祠られていた。越後を二分する大山米山は標高約九九三米、北麓の海岸通は俗に米山峠・米山三里とも称され、北陸道等に通ずる交通の要所であつた。中世には軍事上の拠点ともなり、史料にもしばしば記載が見出される。山中、『義経記』の記事に基づく亀割坂、胞那神社が残る。

昼間は視力不自由な梟にとつて、諸病悉除の薬師こそは何より有難い存在であつたらう。米山薬師の開山は泰澄上人と言われ、今に飛鉢伝説が伝えられている。泰澄は加賀国白山を開いたことで知られ、役の行者の伝承にも登場するなど、修験道に所縁深い名僧である。その上人が開いた米山は、山岳信仰の一拠点として勢力を延ばし、室町後期には都でも著名な名利となつた。

『蔭涼軒日録』によれば、米山寺住持は室町幕府の命によつて入寺した(延徳二年十二月十八日条ほか)。寺からは毎年、蠟燭百挺が献上されている。「米山寺」「米山薬師」の名は、『蔭涼軒日録』永享八年(一四三六)三月四日条から延徳四年(一四九二)六月二日条に至るまで、二十余箇所に

記載がある。延徳四年六月二日条に転写された『十利位次簿』
 「十利次第」には、「等持寺」「臨川寺」「長楽寺 上野」
 等々と並んで「米山寺 越後」と録されている。米山寺の
 名声がいかに高かったかを十分に窺い知ることができよう。
 寛正六年（一四六五）七月八日、堯恵は善光寺参詣の途
 次、米山薬師に立ち寄った。

明れば八日になり侍りき、御縁日にまかせて、米山へ
 こゝろざしぬ、はるぐとよちのぼりて、絶頂より瞻望
 するに、煙水茫々として、山また天涯につらなる、

雲のはのきゆれば山もかさなれる 波の千里に秋
 かぜぞ吹く
 （『善光寺紀行』）

また、室町末期、当地を治めた柿崎氏は米山薬師を篤く
 信仰し、合戦の際には必ず米山薬師画像と梵字像を身に付け
 たという。その画像は今なお、直系の御子孫に伝えられてい
 る由である。

翻って、御伽草子『ふくろふ』の老梟は、何故、山岳宗
 教の一拠点「米山」山麓に居を構え、米山薬師に絶ったのだ
 ろうか。

梟の懸想文に対する鸞姫の返書には、注目すべき言葉が
 記されている。

返事に及ばず候へ共、御ふみのうち、おそろしく思ひ
 参らせて、ことかりそめの申事にて候へども、我が身
 のことは、いやしきもの、そもじ様は葛城の山の神の
 ゆかりにてましますば、まことしからず思ひ参らせ候、

（松本本『ふくろふ』）

文中、「葛城の神のゆかり」と述べられてあるのは意味深
 長である。葛城の神は、醜い自分の姿を恥じて、昼は隠れ、
 夜のみ活動したと伝えられる神であった。この点、梟の特徴
 と一致していよう。梟は夜行性であり、年を重ねるごとに醜
 くなる鳥と考えられていたからである。

流離ハ梟ゾ、不孝鳥デ大ニナツタレバ母ヲ食フ鳥ゾ、
 （中略）コ、ニ若テカヲヨイ者ガアルハタガゴゾ、フク
 ロウノ子ゾ、シタガ大ニナツタレバ見ニクイゾ、

（書陵部本『毛詩抄』二二）

葛城の神、即ち一言主の神の名は、『古事記』雄略天皇葛城山登山の条に見える。天皇は葛城山で自分と瓜二つの人物に出会ったが、それは一言主の神であつた。神は天皇と終日、狩を共にした。『日本霊異記』上巻「孔雀王の呪法を修持して異しき験力を得、以て現に仙と作りて天を飛びし縁 第二十八」には、この神は、修験道の祖である役の行者に呪縛されたと伝え、「彼の一言主の大神は、役の行者に呪縛せられて、今に至るまで解脱せず」と記されている。

一言主の伝説は御伽草子にも取り上げられた。『役の行者』は、葛城の神が狩りをした説話を語るが、これは猛禽類として小動物を狩る梟の特徴と合致する。

この葛城の明神と申は、昔、雄略天皇と申す帝、この山に狩りし給ふ時、そのかたち世の常ならぬ大人、忽然としてあらはれ出て、帝と共に終日狩り暮らし給ふ、(中略) この神のかたち、醜くまします故に、昼は恥ぢ給ひて、夜なく橋をつくり給ふ、

(中野莊次藏『役の行者』)

また、『四生の歌合』『四十二の物あらそひ』に於いても、

葛城の神は姿醜く、夜のみ現われる神であつた。

十一番 左 はい

葛城の神にはかはる契りかな 夜のあふせの身にはかなはず (東洋文庫蔵『四生の歌合』)

見目の悪きと、ありかのあると さいしやうの中將

葛城の神は夜とも契りけり しらすありかをす、むならひは (赤木文庫本『四十二の物あらそひ』)

「葛城の神のゆかり」と称され、米山薬師の麓に住んでいた梟は、修験道と無縁では有り得ない。特に、『ふくろふ』の一伝本である東大本『ふくろふのそうし』は、梟の栖を「出羽羽黒山」と記している。

出羽国羽黒山のもとに、ふくろふといふ鳥、年臘を申すに、年の齡八十三に成しが、ある日の雨中のつれぐに心の内に思ふやう、我、この年になりぬれど、栄華を極むる事もなし、所詮、栄華をせんには、酒と女にしくあらじ、 (『ふくろふのそうし』)

『ふくろうのそうし』によれば、梟は「山岳信仰の拠点」に住んでいた。この点、米山の名を挙げた『ふくろふ』と重なり合う。これは単なる本文上の小異ではなく、注目されてしかるべき合致点であると考ええる。

東大本では、梟は米山薬師に参つた後、信濃・飛騨・美濃・近江の国々を経て、比叡山、三井寺に参詣、祇園八坂清水、六角堂、誓願寺の和泉式部墓、東寺、東福寺、鞍馬寺、北野、愛宕、等々を過ぎ、大和、難波、多武峰、高野、熊野、伊勢熱田、三島、箱根に参り、祈念して、相模国大山、武蔵・下野・常陸から出羽国に戻る。梟の足跡は名刹を巡っているが、特に山岳信仰の色彩の濃い大寺が含まれる点を看過してはならないであろう。これらを単なる名所尽くし、道行文文として把握するのでは不十分と思う。

梟と修験道との関わりを示唆する要素は、そればかりではない。鶯姫からの返書を開いて絶望した梟は、「木の葉を掻き集めて」横になる。

さるほどに、ふくろふ、余りの事のもののうさに、木の葉かき寄せ、枕とし、まどろむところに夢をぞ見たりける、
 (『ふくろふ』)

ふくろう、此よし見るよりも、なをく思ひにあこがれて、涙ばかりにありしが、余り思ひの悲しさに、木の葉かき寄せ、枕として、少しまどろみけり、ところに、新たに夢をぞ見たりけり、
 (『ふくろうのそうし』)

「かやうに候者は、鞍馬の奥僧正が谷に住む木葉天狗にて候」(謡曲『鞍馬天狗』)、俳諧の付合語「天狗」を挙げるまでもなく、「木の葉」は修験道に深く関わる語彙であつた。九州大学本「熊野の本地」に、木の葉衣を身に着け、山中で遊ぶ童子の姿が描かれていることも併せて想起される。⁽⁵⁾下つて、江戸末期の山伏、覺牛院行智は自著を『木葉衣』と題した。

一方で、鳶と梟とが対で登場する例が散見する。「鳶鴟」を初め、梟が鳶と対で登場する例は少なくない。

梟 フクロフ (中略) 不孝鳥也 鴉 同

(黒川本『伊呂波字類抄』)

或いは、『箋注倭名類聚抄』七「鳥名」梟の項にいう。

毛詩正義引陸璣疏、亦云食其母、此云食父母、恐誤、
 (中略)毛詩、流離之子、旄丘、陸璣疏云、流離、梟也、
 自關而西謂梟爲流離、其子適長大、還食母、(中略)按
 爾雅云、梟鴟、郭曰、土梟、邢昺疏云、梟一名鴟、然
 毛詩瞻印云、爲梟爲鴟、兼拳二名、則非一鳥、故爾雅
 舊注、以爲大小之別名也、與流離之梟、鴟鴞之鴟、同
 名異物、但未詳其何物、又不得充布久呂布也、毛詩瞻
 印、梟鴟惡聲之鳥、不言形狀、

〔箋注倭名類聚抄〕七「鳥名」

御伽草子『鴉鷲記』では、討死した「鴉出羽法橋」に続
 き、「梟木工允」の追善が行われる。

鴉出羽法橋ヲバ東山ナル処ニカキ入ヌ、兒同宿ノナゲ
 キ無申計、(中略)法橋ハ八宗兼学シタリケレバ、頭密
 ノ弟子トモ有テ、或ハ法花問答講ヲシ、或ハ理趣三昧
 ヲ行ヒ、護摩ヲ焼キ、一日経ヲ書キ、何レモ嚴重ノ追善
 也、(中略)次、梟木工允、子息之諷誦、哀候、忽ニ翻逆
 罪思、偏執梟子之恩、鳴、梟鐘一韻、訪太山王裁断
 給、其功德深シ、然者、先考、闇ノ中ニモ得明、眼ハ

乍其三明六通之聖者ニ伴テ証果、法々ト嘯、法音、不
 改、四弁八音ノ如來ニ親テ、覺ヲ唱ヘシ、

〔尊経閣文庫本「鴉鷲記」〕

書陵部本「蒙求抄」には鴉と梟とが相並んで注されてお
 り、「鳴梟ハ鴉梟也ト注シタゾ、サアレバトビトフクロノ事
 カゾ」とある。

鳴梟ハ鴉梟也ト注シタゾ、サアレバトビトフクロノ事
 カゾ、一ノ事カニノ事カ知ヌゾ、一ナガラ不孝ナ者ゾ、
 トビヤフクロラクワセテ、孝行ナ物ニナサシタゾ、所
 生ハ母ノ事ゾ、生ンダホドニゾ、梟ヲ不孝鳥ト云ゾ、
 夏至ノ日ハフクロヲ汁ニシテ、百官ニ下サル、ゾ、梟
 羹ト云ゾ、萬物ヲ養フ日、母ヲソコナフ鳥ヲ汁ニシテ
 クワセラル、ゾ、漢儀夏至、賜百官梟羹、欲絶其類、
 夏至微陰始起、育萬物、梟害其母、故以此日殺之、

〔蒙求抄〕五

以て、梟も鳶も親不孝の鳥として、理解されていたこと
 が分かるであろう。事実、昔話には「鳶不孝」と題する例が

ある。例えば、長崎県下県郡に伝わる昔話。

鳶はいつも親のいいつけに逆らう。親は死ぬときに、山に埋めてもらおうと思つて、川に投げ込んでくれと遺言する。鳶は親の死ではじめて親不孝に気づいて遺言どおりにする。このために雨が降ると流れるかと心配して鳴く。

〔日本昔話大成〕第一巻・動物昔話

同話は、香川・広島・岡山・島根・京都・愛知・福島等々の各地にも伝えられた。「雨の前には「びんひよろ」と悲しそうに鳴き、天気の時嬉しそうに鳴く」（奈良県北葛城郡）、「雨の降る前にびーひよろと鳴く」（兵庫県神崎郡）、「海が干たら拾い出して山に埋めようと、「うみん（海が）ひーひよひよ」と鳴く」（静岡県小笠郡）、「鳶が鳴くと二、三日で雨が降る」（同磐田郡）、「鳶が鳴くと海水が天に上つて雨になる」（同浜名郡）などと語られるように、その特徴的な鳴き声は人々の耳に強く印象づけられていた。「鳶不孝」の主人公は、同じく鳴き声に特色のある雨蛙・山鳩・閑古鳥に変えて語られることもあった。

「梟」もまた、親不孝であるばかりか、類いしない悪声の持ち主であった。そのことは、幼童にさえも良く知られた次の逸話が示している。

梟あり、鳩にあふ、鳩問ふていはく、汝、いづくへかゆく、梟こたへて、われ、まさに東路の方へうつらんとすといふ、鳩又問ふ、何の故に東へうつるや、梟又こたへて、さと人みなわが鳴く声をにくむ故、住所をかふる也といふ、鳩又いはく、汝よく鳴くことを改めばよからん、その鳴くを改むること能はずは、今、東へうつりたりとも、東のさと人、なほなんぢが声をにくまるといへり、

〔実語教稚絵解〕

右の説話は「人の自ら我があやまちを改めずは、いづくへゆきても、人に憎まる、といふたとへ」として引かれた。古く『説苑』に見え、本朝に於いても『譬喻尽』に収録されるなど、広く親しまれた例話であった。

悪声の梟もまた、「鳶不孝」の主人公として登場する（石川県七尾市）。根性の曲がつた梟は母親の言葉に悉く反対したという（『南方熊楠全集』第二巻所収「南方随筆」）「親の

言葉に背く子の話」。

修験道に関係深い鳥と言えば、鳶と鳥とが真先に思い起こされる。しかし、梟もまた、中世にあつては、修験道に近い鳥として認識されていたと思しい。鳶と梟が並び記される例が多出することはその証左と言えよう。

四

ここに、鳶と梟とを印象的に描いた絵巻がある。それは室町初期成立の『十二類絵巻』である。本作品については、後崇光院自らが制作に関わった可能性が指摘されており、『看聞御記』永享十年（一四三八）六月八日条・嘉吉元年（一四四一）四月四日条に『十二神絵』の名で記載がある。禁裡に於いても披見された堂々たる絵巻であつて、異類物の白眉として名高い。後崇光院・青蓮院尊道親王筆と伝えられる絵巻三巻のほか、ダブリンのチェスター・ビーティ・ライブラリーにも絵巻三軸が所蔵されるなど、現存の伝本計十七本が報告されている（松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」）。異類たちの身に纏う衣装の文様、各台詞に至るまで、その動物の特徴や故事諺を縦横に活用して表現さ

れる。冒頭歌合の場面一つにしても、既知に富み、伝統的物語を駆使し、優れた判詞を添えており、作者が和歌文学に通暁していたであろうことは想像に難くない。挿絵は無論、物語の構想や詞章、筆跡などを検討すると、相当の教養を有する人物が制作に携わったと考えられる。

『十二類絵巻』の発端は、中秋の名月を愛でるべく、葉師如來の眷属である十二支の動物たちが集まり、月を題に歌合を催したことに始まる。凡下の狸を連れた鹿が訪れ、見事に判者を勤めたので、十二類は各々自らに相応しい品を以てその労に報いた。鶏は鶏冠海苔、犬は交野の雉、馬は馬草豆、兎は萩の花、猪は山の芋を持参、猿は扇を翳し、一座の中央に立つて舞を披露する。

一部始終を脇で見ていた狸は、鹿の果報が羨ましくてならない。彼は、十二類が再び歌合を催すことを知り、身の程知らずにも判者になろうと推参した。立腹した十二類は狸を散々に痛め付けた。狸は命からがら逃げ出し、雪辱戦を企てて、狐、猫、烏ほか、梟と鶏を語らつて反逆に及んだ。特に、鶏の与同は、愛宕山太郎坊天狗の助力と直結し、狸を大いに勇気づけた。

しかし、十二類の先制攻撃に狸軍は散り散りとなった。

十二類は勝利の美酒に酔い、鶏が扇を手に舞を一差し舞う。傍らで見物していた猿は、「我が舞ひたりしにはまし類、あら、おもしろし」と絶賛した。

一方、古鴉は狸に向かつて、「あはれ、愛宕の山に引き登りて、くづれ坂をきり、ひと支へしてみ候ばや」と提案し、早速、味方を集めて来た。一同は愛宕山太郎坊の援助を受け、十二類へ夜襲をかけた。手傷を負った十二類は軍議を開く。

いよいよ、両軍決戦の時が来た。互角の戦いと見えたが、辰太夫が搦手に回り、雷鳴が轟くと、狸軍は総崩れとなった。遂に、主力と頼んだ古鴉が討たれ、狸は戦場を離脱、世の無常を悟って出家し、後生を祈って誂念仏に励んだという。

『十二類絵巻』の一大特徴として注視すべきは、動物たちを番えて興趣を添えようとした点にある。冒頭の十二類の歌合は、その趣向を端的に示している。本作品に十二類の宴の場面が二度に互つて描かれたことも、同じ理由によるものと思う。いずれも十二類が車座に座り、その中央で舞を披露する動物が描かれる。第一は、物語冒頭近く、歌合の後、鹿を労う宴に於いて、猿の舞が披露される。狂言「靱猿」、御伽草子『藤袋の草子』などに見出される通り、猿の舞はしばしば中世文芸に取り上げられた。第二は、十二類が狸に圧勝

した夜のこと、鶏は先の猿と全く同じく、車座の中央に進み出て、勝利を祝う舞を舞ってみせる。鶏の舞が猿の舞と対比させて描かれたことは確かであろう。但し、チエスター・ビーティ本は、猿の舞の場面は堂本本同様、猿に纏わる故事を踏まえた詞章を書き込むが、後半の鶏の舞の場面は紙幅縮小され、詞章も省略されている。しかし、鶏の頭上には、数行分、文字を削った痕跡が残る。チエスター・ビーティ本の参照した親本には、恐らく、鶏の舞に相応しい詞章が記載されていたのであろう。本来、この二場面は、『十二類絵巻』に於いて対として描かれた重要な場面であつたはずである。

では、なぜ、『鶏』が舞つたのであろうか。

恐らく、ここには「鳥兜」という言葉からの連想が作用していたと思う。「鳥兜」とは鳳凰を象つた被り物であり、舞楽の装束の一つ、「貴徳綾切などの着るかぶと」（『塵袋』巻七）であつた。猿の舞は、室町に入つて興隆した猿楽を、鶏の舞は「鳥兜」を着けて舞うべき伝統的舞楽を暗示している。しかも、これらの場面は単なる芸比べには終わらなかつた。「我が舞ひたりしにはまし、あらおもしろし」。猿が鶏の舞に脱帽するという設定は、『十二類絵巻』の作者により、新興の猿楽に比して伝統的舞楽に軍配が挙げられたこと

になる。それは、後崇光院自らが制作に携わったと推測される『十二類絵巻』の成立事情とも無縁ではなかったであろう。

狸軍の完敗場面も、対となる動物に注目して読み直す必要がある。狸が完膚無きまでに打ちのめされたのは、愛宕山太郎坊の一味である「古鶏」が誅伐されたためであった。古鶏の最期を見届け、観念した狸は戦線を離脱し、愛宕山月輪寺に逃げ込むのである。

この場面で最も興味を引くのは、「古鶏」と共に「梟」が討たれていることである。即ち、「鶏梟」は、「牛馬」によって同時に誅殺されてしまう。世俗に膨れ面を「梟の馬に蹴られたるが如し」という（明暦二年刊『世話焼草』）。挿絵は、まさしく馬によって成敗される梟と、傍らで牛に息の根を止められる鶏の様子を長大な画面で描く。この挿絵は、『世話焼草』に書き留められた諺の趣が、二百余年以前に存在していたことを窺わせる。

『十二類絵巻』の最後の山場に、鶏梟が配置された意味は軽くない。恐らく、これらの組み合わせは随意に選択されたものではなかった。梟は何故、鶏と同時に討たれなければならなかったのか。それは、梟が「葛城の神のゆかり」であり、修験道に所縁深い鳥であったからに他ならない。

鶏梟の死は愛宕山太郎坊の敗退を意味する。最早、狸の復権は望めないことを、他のどの手段よりも明瞭に読者に印象づける。換言すれば、鶏梟の死によってのみ、この合戦は終わりを告げ得たのであった。

五

御伽草子『鴉鷲記』では、梟木工允が自らを次のように紹介している。

卑下モナキ申事ナレドモ、愚身ガ目元ノ冷サ、誠、眼光
射人者歟、木拳ノ付様、是、衆鳥ノ所似希也、ミザマ
ハ去事ナレドモ能芸肝要也、エセゲナレドモ、涯分ノ
能ヲ具、明日ノ雨ヲ知りテハ糊スリ置ト鳴キ、老者ニ告
死、其声、呼犬、鼠ヲ取事、猫ハツカシク、鳥ヲ取事、
鷹ニモ似タリ、又年齢ヌレバ通力イデキテ蕩、人事、
如天魔、サレバ神通自在ニシテ、夜陰ニ物ヲ見事、不
異阿那律天眼、即座ニ現物恠、可編寶頭盧奇特、

（尊経閣文庫『鴉鷲記』）

文中、「又年齢ヌレバ通カイデキテ蕩^{タブラカス}人事、如天魔」
とある点に注目しておきたい。

通力を得た梟は、確かに人間をたぶらかすことがあった。
冒頭の狂言「ふくろふ」に登場した梟も、そうした通力を得
た一羽であつたと言ふことができる。

しかし、俗人であれば誑かし得た梟も、信力ある験者の前
には何の威力も發揮することはできなかったはずである。然
るに、狂言の山伏は、彼自身が梟に誑かされてしまった。
狂言「ふくろふ」の可笑しみは、ここにもあつたと思う。舞
台上で演じられる梟の鳴き声や仕草の滑稽、呪文だけが「ふ
くろふ」の笑いではなかった。似非山伏が調伏に失敗した相
手は、他ならぬ「梟」であつた。誠の験力を備えた山伏ならば、
修験道に縁あるこの鳥に悩まされるはずはない。抑も、梟に
取り付かれた人間が担ぎ込まれることもなかったであらう。

調伏に成功するどころか、遂には自分さえも「梟」に取
り付かれてしまう梟山伏、狂言「ふくろふ」は、「梟」を素
材として用いたところに眼目があるのではなからうか。本作
は、その点で山伏の贗物ぶりを遺憾なく發揮させた曲である
と言えよう。

我々は、狂言「ふくろふ」の忘却された笑いを読み取ら

なければならぬ。

注

(1) 拙稿「梟の懸想文―越後米山薬師のこと―」(近刊『説話論
集』所収、清文堂) 参照。『雑宝蔵經』には以下の説話が載
る。

昔有烏梟。共相怨憎。烏待昼日。知梟無見。踏殺群梟。噉
食其肉。梟便於夜。知烏眼闇。復啄群烏。開穿其腸。亦
復噉食。畏昼畏夜。無有竟已。時群烏中。有一智烏。語衆
烏言。已為怨憎。不可救解。終相誅滅。勢不兩全。宜作方
便。殄滅諸梟。然後我等可得歡樂。若其不爾。終為所敗。衆
烏答言。如汝所說。當作何方。得滅饑賊。智烏答言。爾等
衆烏。但共啄我。拔我毛羽。啄破我頭。我當設計。要令殄
滅。即如其言。憔悴形容。向梟穴外。而自悲鳴。梟聞聲已
便出語言。今爾何故。破傷頭腦。毛羽毀落。來至我所。悲聲
極苦。欲何所說。烏語梟言。衆烏饑我。不得生活。故來相
投。以避怨患。時梟憐愍。欲存養畜。衆梟皆言。此是怨家。
不可親近。何緣養畜。以長怨敵。時梟答言。今以困苦。來
見投造。一身孤單。竟何能為。遂便畜養。給与殘肉。日月轉
久。毛羽平復。烏詐歡喜。微作方計。銜乾樹枝并諸草木。著
梟穴中。似如報恩。梟語烏言。何用是為。烏即答言。孔穴
之中。純是冷石。用此草木。以御風寒。梟以為爾。默然不
答。而烏於是。即求守孔穴。詐給使令。用報恩養。時梟暴

雪。寒氣猛盛。衆梟率爾來集孔中。烏得其便。尋生歡喜。銜牧牛火。用燒梟孔。衆梟一時。於是殄滅。爾時諸天。說偈言曰。諸有宿嫌處。不應生體信。如烏詐託善。焚滅衆梟身。

- (2) 前田勇『尼戲叢考』(昭和十九年、弘文社)、南方熊楠「橋の下の菖蒲」(『南方熊楠全集』第三卷・雜誌論考Ⅰ所収、昭和四十六年、平凡社)、三谷栄一「橋の下の菖蒲は―狂言『山伏物』の一句」(『実践文学』第二号、昭和三十年十月)、佐竹昭広「嘲笑の呪文―狂言の山伏―」(『下剋上の文学』所収、一九九三年、筑摩書房) など参照。

- (3) 伊藤正義ほか編『和漢朗詠集古注釈集成』(一九九七年、大学堂書店) 参照。

- (4) 室岡博『米山葉師信仰―柿崎和泉守景家―』(一九九二年、柿崎町教育委員会内柿崎和泉守景家顕彰会)、同『柿崎城・木崎城発掘記録』(昭和五十七年)、『柿崎町の歴史』第一集(柿崎町史編さん委員会、平成十三年)『柿崎町史』『続柿崎町史』、『越後野志』、『柿崎町文化財』(柿崎町教育委員会、昭和五十二年)、『柿崎和泉守 景家公と楞嚴寺』(柿崎和泉守顕彰会、昭和五十四年) 及び注(1) 拙稿など参照。

- (5) 拙稿『熊野の本地』私注』(『成城国文学』第九号、一九九三年三月) 参照。